

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 3 1 5 号	氏 名	山口 健
<p>[ 論文題名 ] Decision making for breast lesions initially detected on contrast enhanced breast MRI ( 乳腺造影 MRI で発見される偶発病変に対する診断決定に関する検討 )</p> <p>雑誌名 , 巻 ( 号のみの雑誌は号 ) , 頁 - 頁 , 発行西暦年 American Journal of Roentgenology , in press</p> <p>著者名 Ken Yamaguchi, David Schacht, Charlene A. Sennett, Gillian M. Newstead, Takeshi Imaizumi, Hiroyuki Irie, Hiroyuki Abe</p> <p>[ 要 旨 ] 目的： 乳腺疾患の診療において触診やマンモグラフィ、超音波検査にて指摘されず、乳腺の造影 MRI にて初めて指摘された偶発病変 ( MR-detected lesion ) の意義を評価することと、これらの病変に対し画像所見及びどのような適応のもとに撮影されたかの両方を考慮に入れて、これらの病変に対するマネージメントを考察すること。</p> <p>方法： 2003 年から 2009 年に撮影された 4260 例の乳腺 MRI にて指摘された偶発病変 554 例に対し、引き続き行われた画像検査、バイオプシー、手術の結果を検討した。MRI の検討では、BI-RADS (Breast Imaging Report and Diagnosis System) の所見用語を用いて評価した。</p> <p>結果： 554 例の病変中、134 例が悪性であった。サイズの中央値は悪性が 15.45mm、良性が 7.48mm で、悪性病変は良性病変に比べサイズが有意に大きかった。造影 MRI による検討では、irregular shape、irregular or spiculated margin、heterogeneous or rim enhancement を呈する腫瘍、rapid uptake や washout pattern を呈する病変が悪性の頻度が高かった。MRI の適応に関する検討では、原発不明の腋窩リンパ節転移に対する原発巣検索、乳癌の術前 staging や術後断端陽性の精査で指摘された病変は悪性の頻度が高かった。また、偶発病変以外に index lesion となる乳癌が存在した場合、その同一領域に存在する偶発病変 ( same quadrant lesion ) は悪性の頻度が高かった。MRI 後に行われた Second-look 超音波検査では、悪性病変の方が良性病変に比べて病変が描出される割合が有意に高かった。以上の結果を踏まえて行った多変量解析では、MRI の適応、サイズ、heterogeneous or rim enhancement が独立した悪性病変の予測因子であった。</p> <p>結語： 乳腺造影 MRI における偶発病変に対する診断決定においては画像所見のみならず、患者の MRI の適応も考慮に入れるべきである。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 3 1 6 号	氏 名	秋山 隆行
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Silver oxide-containing hydroxyapatite coating has in vivo antibacterial activity in the rat tibia</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Journal of Orthopaedic Research, in press</p> <p>著者名 <u>Takayuki Akiyama</u>, Hiroshi Miyamoto, Yutaka Yonekura, Masatsugu Tsukamoto, Yoshiki Ando, Iwao Noda, Motoki Sonohata, Masaaki Mawatari</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>(研究の目的) 細菌感染は重要な人工関節術後合併症である。インプラント感染の予防のために、我々は酸化銀含有ハイドロキシアパタイト (Ag-HA) コーティング技術を開発し、研究を行ってきた。今回、ラットの脛骨内において Ag-HA の抗菌性について検討した。</p> <p>(方法) HA をコーティングした試験片と酸化銀を 3% 含有した HA をコーティングした試験片を準備し、10 週齢の SD ラットの脛骨骨髓腔内にメチシリン耐性黄色ブドウ球菌菌液を接種した後、試験片を挿入した。挿入後 24・48・72 時間に脛骨を摘出し骨内生菌数を測定した。挿入後 4 週に下肢を摘出し X 線撮影を行い、感染所見をスコア化した。また、組織学的観察も行った。Ag-HA 群については屠殺前に血液を採取し血清銀濃度を測定した。</p> <p>(結果) 挿入後 24・48・72 時間の脛骨内生菌数は HA 群と比較して Ag-HA 群で有意に少なかった。挿入後 4 週の X 線評価の感染スコアも Ag-HA 群で有意に低値であった。また、組織学的観察においても Ag-HA 群で膿瘍や骨吸収などが少なかった。血清銀濃度は 48 時間頃をピークに増加し、その後減少した。</p> <p>(考察) Ag-HA は銀イオンを放出することで抗菌性を発揮する。銀イオンの放出が多い急性期において骨髓内での細菌の増殖を抑制し、その結果、4 週後のレントゲンにて感染所見が抑えられた。</p> <p>(結論) Ag-HA は骨内において抗菌性を有することが示され、人工関節感染のリスク低減の一助となることが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報告番号 ① 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	高島 利
<p><b>[ 論文題名 ]</b>          Feeding with olive oil attenuates inflammation in dextran sulfate sodium-induced colitis in rat</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年          Journal of Nutritional Biochemistry, in press</p> <p>著者名          高島利、坂田資尚、岩切龍一、白石良介、小田康友、井上範江、中山敦史、戸田修二、藤本一眞</p> <p><b>[ 要 旨 ]</b>  <b>【研究の目的】</b>          潰瘍性大腸炎 (UC) における大腸の慢性炎症は、大腸癌のリスクを高くする。これまでオリーブオイルは、抗炎症や抗酸化作用があることが知られているが、Extra virgin olive oil (EVOO) が UC の炎症、細胞増殖および大腸発癌に関する効果については詳細に調べられていない。今回、ラットを用いてヒト UC の類似実験モデルである dextran sulfate sodium-induced colitis (DSS 腸炎) を作製し、EVOO が炎症、細胞増殖および大腸発癌に与える効果について調べた。</p> <p><b>【方法】</b>          DSS 群は、4%DSS 飲料水の自由飲水 1 週間ついで DSS を含まない飲料水の自由飲水 1 週間で 3 サイクル実施し、EVOO は、5%EVOO を含むエサを投与した。5 週齢雄性 SD ラットを対照群 (DSS、EVOO 未摂取) DSS 群、DSS + EVOO 群の 3 群に分け、実験開始 5 週間後に屠殺し、摘出した大腸を組織学的および生化学的に評価した。</p> <p><b>【結果】</b>          DSS+EVOO 群は、DSS 群に比べて Disease activity index、体重の減少、Histological score、COX-2、iNOS の発現を軽減し、DSS によって亢進した細胞増殖を抑制した。さらに大腸発癌に關与する STAT3 とその活性化型 pSTAT3 の発現を抑制した。</p> <p><b>【考察】</b>          細胞の癌化に重要な働きをする STAT3 が UC 患者で上昇することが知られているが、今回 UC 実験モデルにおいて、EVOO は STAT3 とその活性化を抑制した。また、EVOO は、DSS により亢進した細胞増殖を抑制する一方、低下したアポトーシスを回復させた。従って、EVOO は、DSS 腸炎の炎症を軽減し、大腸発癌を抑制する可能性もあることが示唆された。</p> <p><b>【結論】</b>          EVOO は、UC の大腸発癌のリスクを低くする可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	田畑 絵美
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Immunopathological Significance of Ovarian Teratoma in Patients with Anti-N-methyl-D-aspartate Receptor Encephalitis</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁 - 頁，発行西暦年 European Neurology, in press</p> <p>著者名</p> <p>田畑絵美，増田正憲，江里口誠，横山正俊，高橋幸利，田中恵子，雪竹基弘，堀川悦夫，原英夫</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>背景： 卵巣奇形腫関連傍腫瘍性脳炎は抗 NMDA 受容体抗体等が関わる免疫性神経疾患であり各種免疫療法と共に卵巣奇形腫切除による治療効果を認める。卵巣奇形腫と脳炎の関連について卵巣奇形腫における免疫組織学的研究による検討は重要であると考える。</p> <p>目的： 卵巣奇形腫関連脳炎群 3 例および卵巣奇形腫切除を行った非脳炎群 26 例での卵巣奇形腫の臨床像、および卵巣奇形腫の免疫染色（GFAP,Iba2, SMI-31,CD3,CD4,CD8,CD20, NMDA 抗体 NR1 および NR2）を行い、差異について検討する。</p> <p>結果：非脳炎群 26 名中 4 名が組織の挫滅が強く除外となり 22 名が対象となった。一方、NMDA 受容体脳炎群は 3 名であった。脳炎群で非脳炎群と比較し優位にリンパ球の浸潤、とくに B 細胞の神経組織周囲への浸潤を認めた。</p> <p>結語；NMDA 受容体脳炎群では非脳炎群と比較し神経細胞周囲にリンパ球浸潤を有意に認め、免疫学的に関与している可能性が示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は，600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は，研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報 告 番 号 ① 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	嬉野 紀夫
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>A fully integrated, automated and rapid detection system for KRAS mutations.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年          Oncology Reports. 2011 Sep;26(3):609-13.</p> <p>著者名          嬉野紀夫, 荒金尚子, 中村朝美, 佐藤明美, 小宮一利, 岩永健太郎, 光岡正浩, 武田雄二,          林真一郎, 末岡榮三朗, 木村晋也</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>近年の分子生物学・分子臨床腫瘍学の進歩により, 腫瘍の遺伝子異常についての情報なくして投与できない分子標的薬が一般的になってきた。KRAS遺伝子変異はさまざまな臓器の腫瘍で検出され、特に上皮成長因子受容体チロシンキナーゼ(EGFR)阻害剤、抗EGFR抗体薬の治療抵抗性を示すマーカーであることが報告されている。このように、分子標的治療の有効性の予測のためには、KRAS遺伝子変異の正確および迅速な検出は、きわめて重要である。</p> <p>本研究の目的は、KRAS遺伝子変異の正確で迅速な全自動検出システムを確立することである。136例の肺腺癌患者検体においてダイレクトシーケンス(DS)法、及び60分以内に全自動でデータを得ることが可能なクエンチングプローベ(QP)法を用いてKRAS遺伝子変異を測定した。</p> <p>QP法及びDS法による測定結果は、136例のうちの2例以外の全てで同一であった。異なった検査結果となった2例においては、共にがん細胞量が少ない検体の結果であり、QP法においてはKRAS遺伝子変異陽性であったが、DS法においては陰性であった。このように、KRAS遺伝子変異測定においてQP法は、DS法と比較して正確で高感度および迅速な検出システムであることが明らかとなった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	島ノ江 千里
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Gender-specific associations of perceived stress and coping strategies with C-reactive protein in middle-aged and older men and women</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年</p> <p>International Journal of Behavioral Medicine</p> <p>著者名</p> <p>Chisato Shimano, Yasuko Otsuka, Megumi Hara, Hinako Nanri, Yuichiro Nishida, Kazuyo Nakamura, Yasuki Higaki, Takeshi Imaizumi, Naoto Taguchi, Tatsuhiko Sakamoto, Mikako Horita, Koichi Shinchi, Keitaro Tanaka</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b>精神ストレスと疾患が関連するメカニズムは明確ではない。本研究では、心疾患リスクマーカーである高感度 CRP (CRP) について、自覚ストレス、ストレス対処行動との関連を検討した。</p> <p><b>【方法】</b>日本多施設共同コホート研究(佐賀地区)のベースライン調査の参加者 12,069 人 (40-69 歳)のうち、がん、糖尿病、心疾患などの既往がある者、解熱鎮痛剤などの服用者、CRP<math>\geq</math>3,000ng/ml の者を除外した 7,873 名を対象者とした。自覚ストレスと 5 つのストレス対処行動 (感情表出、サポート希求、肯定的解釈、積極的問題解決、なりゆきまかせ) の頻度と CRP との関連をみるために、社会経済的因子、生活習慣因子、心理的因子で調整し、共分散分析を行った。また、対処行動と CRP の関連に対する自覚ストレスの交互作用も検討した。</p> <p><b>【結果】</b>すべての因子調整後、男性で自覚ストレス (P trend &lt; 0.001) と「なりゆきまかせ」(P trend=0.027) に CRP との負の関連がみられたが、女性ではみられなかった。さらに、男性の「サポート希求」と CRP の関連には自覚ストレスの交互作用がみられ (P interaction=0.021)、自覚ストレスの高い群では、「サポート希求」と CRP に負の関連がみられた (P trend=0.028)。</p> <p><b>【考察】</b>自覚ストレスやストレス対処行動は、CRP と負の関連であったことから、健康的な男性の疾患に対する防御因子である可能性が考えられる。</p> <p><b>【結論】</b>自覚ストレスや対処行動と CRP の関連は性特異的であり、この関連は精神ストレスと疾患との関連に重要な意義を持つことが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報 告 番 号 ① 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	三宅 修輔
<p>[ 論文題名 ]          HIF-1 is a crucial factor in the development of peritoneal dissemination via natural metastatic routes in scirrhous gastric cancer.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年          International journal of oncology, 2013 Aug 21. doi: 10.3892/ijo.2013.2068. [Epub ahead of print]</p> <p>著者名          Miyake S, Kitajima Y, Nakamura J, Kai K, Yanagihara K, Tanaka T, Hiraki M, Miyazaki K, Noshiro H.</p> <p>[ 要 旨 ]  <b>【目的】</b>スキルス胃癌の腹膜播種形成における HIF-1 発現の重要性をマウスモデルにて解析・検討した。  <b>【方法】</b>腹膜播種形成能を有するスキルス胃癌細胞株に、HIF-1 発現を完全欠失させた knockdown 株 (KD) および control 株 (SC) を樹立した。in vitro にて増殖能、浸潤能、anoikis 耐性を比較解析した。マウス胃壁に同所性移植し、腹膜播種形成・腹水産生能を解析した。免疫染色にて胃腫瘍の新生脈管評価を行った。一方、腹腔内直接接種モデルでの播種形成能を同所性移植モデルと比較した。  <b>【結果】</b>SC は KD に比し in vitro 増殖能・浸潤能が有意に高かった。逆に anoikis 解析では、KD が SC に比し有意に耐性を示した。同所性移植において SC 群 (n=15) は全例に胃腫瘍形成、14/15 例に腹水産生・腹膜播種形成を認めた。KD 群の胃腫瘍形成は 86.7% と高率であったが、腹水産生および腹膜播種は低率であった。胃腫瘍内のリンパ管の個数・外径および新生血管 MVD は SC 群が KD 群に比し有意に高値を示した。腹腔内接種モデルでは、両群ともに高率に播種形成・腹水産生を認めたが、播種結節個数は KD 群が SC 群に比し有意に多数であった。  <b>【結語】</b>同所性移植 (自然転移) モデルにおいて、HIF-1 発現はスキルス胃癌の腹膜播種形成に重要な因子であることが示唆された。一方、腹腔内接種モデルにおいて HIF-1 発現は腹膜播種形成に影響せず、従来の原発巣から腹腔内への癌散布とは異なる腹膜播種機序が示唆された。また、Anoikis 解析結果もマウスモデルでの差異を示唆した。HIF-1 は原発巣の新生脈管を増性させることより、胃癌腹膜播種が新生脈管を介した腹膜転移である可能性が推測された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	菊川 誠
<p><b>[ 論文題名 ]</b>          論文題名          Mixed-Method Outcome Evaluation of a Community-Based Education Program for Medical Students          著者名 <u>Makoto Kikukawa, MD, MMed</u>, Yasutomo Oda, MD, PhD, Kenji Ishii, MD, Maiko Ono, MD, MMS, Hiromi Nabeta, MMedSc, Motofumi Yoshida, MD, PhD, Sei Emura, MD, PhD, Shunzo Koizumi, MD, FACS, Takanobu Sakemi, MD, PhD          掲載雑誌 General Medicine          巻・頁・年 第 15 巻 1 号 (2014 年 6 月号)</p> <p><b>[ 要 旨 ]</b>  <b>【研究の目的】</b> 地域医療実習は日本全国の医学部で行われているが、実習のアウトカムを評価した報告は少ない。本研究の目的は Mixed method (混合研究法) を用いて地域医療実習のアウトカムを評価することである。</p> <p><b>【方法】</b> 佐賀大学医学部 5 年生を対象として 2 週間の地域医療実習を行った。2008 年から 2010 年の間で実習を行った 278 名を対象に実習前後での意識の変化を確認するための 6 項目から構成されたプレ・ポストアンケート、また 2009 年から 2010 年に実習を行った学生を対象に実習後に「最も印象に残った学び」についての自由記載アンケートを行った。プレ・ポストアンケートは対応サンプルによるウィルコクソンの符号付き順位検定で解析を行った。また、自由記載については、第 1 著者と第 5 著者が主題分析を行い、学生の学びを抽出した。</p> <p><b>【結果】</b> プレ・ポストアンケートは 278 名中 263 名から回答を得た (95%)、6 項目全ての項目で実習後は実習前と比べ有意にスコアが上昇していた。自由記載は 181 名中 139 名からの回答を得た (77%)、主題分析から、以下 10 因子が抽出された。1. 多職種連携(39)、2. 地域医療機関の役割と連携(29)、3. 患者中心(23)、4. 信頼関係(22)、5. 総合診療能力(14)、6. プロフェッショナリズム(11)、7. 医療における経営(11)、8. コミュニケーション(5)、9 疾病内容(5)、10 継続医療(4)</p> <p><b>【考察・考察】</b> 我々は学生が地域医療実習から 4 つの主な学び (多職種連携・信頼関係・地域医療機関の役割と連携、患者中心) を得ていることを見出した。本地域医療実習が地域医療の理解に貢献していることが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	Janette Mareska Rumbajan
<p>[ 論文題名 ]          Comprehensive analyses of imprinted differentially methylated regions reveal epigenetic and genetic characteristics in hepatoblastom.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年          BMC Cancer, 13, 608-618, 2013</p> <p>著者名          Janette Mareska Rumbajan, Toshiyuki Maeda, Ryota Souzaki, Kazumasa Mitsui, Ken Higashimoto, Kazuhiko Nakabayashi, Hitomi Yatsuki, Kenichi Nishioka, Ryoko Harada, Shigehisa Aoki, Kenichi Kohashi, Yoshinao Oda, Kenichiro Hata, Tsutomu Saji, Tomoaki Taguchi, Tatsuro Tajiri, Hidenobu Soejima, Keiichiro Joh</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>研究目的          ゲノム刷り込み遺伝子の発現は、DNA メチル化可変領域 (DMR) のメチル化により制御される。腫瘍では、一部の DMR のメチル化異常や刷り込み遺伝子の発現異常、コピー数異常などが報告されている。しかし、ゲノム中に散在する多数の DMR について包括的に解析した研究はない。本研究では、肝芽腫における DMR のエピゲノム・ゲノム異常を明らかにするために、33 ヲ所の DMR について解析した。</p> <p>方法          12 例の肝芽腫および腫瘍隣接正常組織と 3 例の正常肝臓について、33 ヲ所の DMR と LINE-1 のメチル化を解析した。また、DNA 多型マーカーを用いて、片親性ダイソミーとコピー数異常について解析した。</p> <p>結果          18 ヲ所の DMR に異常メチル化が見られた。異常メチル化の発生頻度は DMR 毎に異なっており、高頻度に異常を示す DMR が存在した。異常高メチル化は腫瘍でのみ見られたが、異常低メチル化は腫瘍隣接正常組織でも見られた。LINE-1 に代表されるゲノム全体のメチル化に大きな差はなかった。11p15.5 と 20q13.3 では片親性ダイソミーやコピー数異常が見られた。</p> <p>考察          肝芽腫では、ゲノム全体のメチル化が比較的保たれているが、一部の DMR のメチル化は腫瘍化に先立って起こる可能性が示唆された。高頻度にエピゲノム・ゲノム異常を示す DMR の存在は、刷り込み遺伝子の発現異常が肝芽腫発生に関連することを示唆した。</p> <p>結論          肝芽腫についてゲノム刷り込みに関連する DMR のメチル化を包括的に解析し、そのエピゲノム・ゲノム異常の特徴を見出した。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	江頭 玲子
<p>[ 論文題名 ] Differential distribution of lymphatic clearance between upper and lower regions of the lung</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Respirology 18, 348-353, 2013</p> <p>著者名 Ryoko Egashira, Tomonori Tanaka, Takeshi Imaizumi, Kazutaka Senda, Yoshinori Doki, Sho Kudo, Junya Fukuoka</p> <p>[ 要 旨 ] 研究の背景及び目的：多くの肺疾患が吸入に伴う肺の損傷の結果として生じる。病原物質が吸入されると、そのクリアランス経路が主に肺障害が生じる部位となり得る。リンパ路によるクリアランスは肺の微小吸入物質の除去において重要な役割を有し、リンパ流から有害物質が漏れ出ることが吸入物質によって生じるびまん性肺疾患の病変分布を説明できる可能性がある。本研究の目的は、炭粉沈着の分布を吸入物質排泄経路のマーカーとして使用することで、頭尾方向の位置関係によってリンパ管クリアランスの分布の違いを評価することにある。 方法：61 例の肺葉切除標本から無作為に各症例 1 切片採取した正常肺組織の HE 染色スライドを検討した。各スライドにおける炭粉沈着の程度を 0-5 の 5 段階のスコアで、気管支血管束周囲領域 (BV) と胸膜直下/小葉辺縁領域 (SP) について評価した。BV におけるスコアと SP におけるスコアの差 (BV-SP) を、その切片におけるリンパ路排泄の優位性が SP にあるか BV にあるかを検討する材料とした。頭尾方向における切片採取位置と BV-SP スコアの関係、切片採取肺葉と BV-SP スコアの関係について検討を行った。 結果：上肺野における BV-SP は下肺野よりも有意に大きく、採取肺葉と BV-SP スコアには関連が見られなかった。 考察：本結果から主たるリンパクリアランスの経路は頭尾方向の位置関係によって異なり、上肺野では気管支血管束周囲領域、下肺野では胸膜下や小葉辺縁領域が主座となることが示唆される。 結論：本研究はある種のびまん性肺疾患において、外科的生検標本において観察される病変の二次小葉内分布が採取部位の解剖学的位置によって変わり得ることを説明可能かも知れない。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏 名 蒋 昌宇
<p>[ 論文題名 ] Synaptic modulation and inward current produced by oxytocin in substantia gelatinosa neurons of adult rat spinal cord slices.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Journal of Neurophysiology, in press</p> <p>著者名 Chang-Yu Jiang, Tsugumi Fujita, Eiichi Kumamoto</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>オキシトシンは脊髄後角レベルで鎮痛に働くが、その作用機序は不明である。成熟ラットから脊髄薄切片を作製し、痛みの制御に重要な役割を果たす膠様質ニューロンにパッチクランプ法を適用し、オキシトシン作用を調べた。オキシトシンは内向き膜電流（脱分極）を生じる一方、興奮性シナプス伝達に影響しなかった。この膜電流は、Na<sup>+</sup>チャネル阻害薬テトロドトキシン（TTX）、AMPA受容体阻害薬および無Ca<sup>2+</sup>液により影響を受けなかったが、高K<sup>+</sup>液、低Na<sup>+</sup>液およびBa<sup>2+</sup>により抑制された。このオキシトシン電流は、K<sup>+</sup>の平衡電位よりも過分極側、あるいは0mV付近で逆転した。また、ホスホリパーゼC阻害薬やIP3誘起Ca<sup>2+</sup>放出阻害薬により抑制されたが、Cキナーゼ阻害薬、Ca<sup>2+</sup>誘起Ca<sup>2+</sup>放出阻害薬およびジブチリル環状AMPIは作用しなかった。以上より、オキシトシン応答はホスホリパーゼCとIP3誘起Ca<sup>2+</sup>放出を介したK<sup>+</sup>やNa<sup>+</sup>の膜透過性変化により生じることが示唆された。一方、GABAやグリシンを介する自発性抑制性シナプス伝達は、オキシトシンにより増加したが、この作用はTTX存在下で消失した。以上のオキシトシン応答は、オキシトシン受容体作動薬によりみられる一方、その受容体阻害薬存在下で消失した。以上より、オキシトシンによる膜脱分極を介した抑制性シナプス伝達の促進がその鎮痛作用に寄与することが明らかになった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	渡邊 聡
<p>[ 論文題名 ] Risk Factors for Resistance to Proton Pump Inhibitor Maintenance Therapy for Reflux Esophagitis in Japanese Women over 60 Years</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Digestion, 86, 323-328, 2012</p> <p>著者名 Akira Watanabe, Ryuichi Iwakiri, Daisuke Yamaguchi, Toru Higuchi, Nanae Tsuruoka, Koichi Miyahara, Kayo Akutagawa, Yasuhisa Sakata, Takehiro Fujise, Yasutomo Oda, Ryo Shimoda, Hiroyuki Sakata, Kazuma Fujimoto</p> <p>[ 要 旨 ] 目的 日本における逆流性食道炎は、高齢女性での有病率が高く重症者が多い。治療は酸分泌抑制目的で PPI の維持療法がおこなわれているが、治療抵抗性を示す症例もある。 今回の研究の目的は女性高齢者における逆流性食道炎患者の特徴を明らかにし、治療抵抗性のリスク要因を探ることである。 方法 調査期間は 2009 年の 3 月と 4 月。6 か月以上 PPI で維持療法中の 60 歳以上の女性逆流性食道炎患者 462 名を対象に行った。 検討項目は年齢、身長、体重、最も悪い時の逆流性食道炎の内視鏡的重症度、ピロリ菌感染、食道裂孔ヘルニア、腰椎後弯、PPI 治療効果に対する満足度である。 結果 全患者の平均年齢は 76.4 歳、平均身長 147 cm、平均体重 49.9 kg、BMI は 24.0 kg/m<sup>2</sup>であった。逆流性食道炎のロサンゼルス分類の内訳は grade A: 69.5%、grade B: 15.8%、grade C: 9.1%、grade D: 5.6%であった。ピロリ菌は 60.5%の患者で陽性であった。裂孔ヘルニアは 63.8%、腰椎後弯は 47.7%の患者に合併していた。PPI の治療効果は 93.5%の患者で「効果あり」、6.5%の患者が「不十分」であった。 PPI の治療効果が「効果あり」になる因子はピロリ菌感染陽性、「効果あり」にならない因子は逆流性食道炎の重症度が grade C または D であった。裂孔ヘルニアと腰椎後弯は逆流性食道炎重症群の危険因子であった。 結論 今回の調査において、逆流性食道炎の内視鏡的重症度とピロリ菌感染陰性が高齢女性逆流性食道炎の治療抵抗性の危険因子であることが確認された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	御塚 加奈子
<p>[ 論文題名 ]  Periostin, a matricellular protein, accelerates cutaneous wound repair by activating dermal fibroblasts</p> <p>雑誌名, 巻(号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年  Experimental Dermatology, 21(5), 331-336, 2012</p> <p>著者名  <i>Kanako Ontsuka, Yori-hisa Kotobuki, Hiroshi Shiraishi, Satoshi Serada, Shoichiro Ohta, Atsushi Tanemura, Lingli Yang, Minoru Fujimoto, Kazuhiko Arima, Shoichi Suzuki, Hiroyuki Murota, Shuji Toda, Akira Kudo, Simon J. Conway, Yutaka Narisawa, Ichiro Katayama, Kenji Izuhara, and Tetsuji Naka</i></p> <p>[ 要 旨 ]  皮膚の創傷修復は、秩序正しく進行する正常な生理的機能である。インテグリン分子を介した細胞基質間の相互作用は、創傷修復に重要であることが報告されている。インテグリンは、細胞同士や細胞外基質との接着を仲介する細胞表面レセプターである。細胞の接着、移動、増殖などに関与して創傷治癒他、生体现象に関わっている。  ペリオスチンは、インテグリン分子と相互作用することによって、細胞の活性化や組織の発達、再構築のためのシグナルを活性化する細胞外マトリクスタンパク質であり、近年、ペリオスチンが創傷修復において強く発現することがモデルマウスで報告された。  今回我々は、ペリオスチンが、皮膚の創傷修復に役割を果たす可能性を検討した。ペリオスチンは創傷マウスにおいて、伸展した表皮下の肉芽組織と真皮・上皮接合部に強く沈着し、ペリオスチン欠損マウスを用いた実験では、野生型と比較し創傷修復の遅延を示した。その遅延は、外因性ペリオスチンを投与することによって回復した。  また、ペリオスチンを欠損させた皮膚線維芽細胞において、増殖と遊走が阻害され、一方、外因性ペリオスチンの投与や強制発現により増殖は促進した。  皮膚線維芽細胞をペリオスチンで処理すると、インテグリンの下流シグナルの活性化を認めた。  今回の結果から、ペリオスチンがインテグリン分子を介して皮膚線維芽細胞を活性化することにより、皮膚創傷修復を促進することが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報 告 番 号 (甲) ・ 乙	第 号	氏 名	本田裕子
<p>[ 論文題名 ]            In vitro assembly properties of human type I and II hair keratins</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年            Cell Structure and Function, in press</p> <p>著者名            Yuko Honda, Kenzo Koike, Yuki Kubo, Sadahiko Masuko, Yuki Arakawa and Shoji Ando</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b>            硬組織を形成するヘアケラチンは毛髪中に多種類発現するが,毛髪形成における各蛋白質の機能的役割は不明である.本研究では,ヒトヘアケラチンの組換え蛋白質を調製し,蛋白質間の相互作用特性と,毛髪の基本構造である中間径フィラメント(IF)の形成特性について,試験管内の実験系を用いて検討する.</p> <p><b>【方法】</b>            大腸菌発現系を用いて,ヒトヘアケラチン5種類(タイプ : K35, K36, K38, タイプ : K81, K85)の組換え蛋白質を調製した.次に,IF形成の基本となるタイプ - 間の相互作用の特異性と安定性について,表面プラズモン共鳴法および2次元電気泳動法を用いて解析した.更に,タイプ と の試験管内重合を行い,異なる組み合わせにおけるヘアケラチンのIF形成特性を比較・検討した.</p> <p><b>【結果】</b>            ヘアケラチンのヘテロ複合体形成特性は,タイプ - 間の組み合わせにより異なり,毛根における発現部位の近い組み合わせは比較的高い親和性を示した.次に,ヘアケラチンはサイトケラチンに比べ高塩濃度条件下でIFを形成し,組み合わせにより形態に違いが認められた.特にK85はIFを束化する特性が強く,細胞の分化初期に発現されるK35-K85の組み合わせはIFの緊密な束を形成した.</p> <p><b>【考察・結論】</b>            5種類のヘアケラチンがそれぞれ異なる重合特性を有し,特にK85がIFを束化する機能性に富むことは,細胞内におけるマクロフィブリルの形成に重要であると考えられる.</p>			

備考 1 論文要旨は,600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は,研究の目的,方法,結果,考察,結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	むらた ともゆき 村田 知之
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Effects of wheelchair seat -height settings on alternating lower limb propulsion with both legs</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Assistive Technology, In press</p> <p>著者名</p> <p>Tomoyuki Murata</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：本研究では、車椅子座面高の設定が両下肢交互駆動に与える影響を検討した。</p> <p>方法：整形疾患のない7名の健常者を対象として、両下肢交互駆動における股関節や膝関節、足関節の初期接触時屈曲角度（FA-IC）や駆動期の関節可動域（ROM-PP）、そして床反力値を三次元動作分析装置と床反力計を用いて計測した。その際、座面高の違いによる影響について比較検討をおこなった。</p> <p>結果と考察：統計的に有意な関係は座面高と速度、ストライド長、膝関節 FA-IC、足関節 FA-IC、股関節 ROM-PP、垂直分力値（VGRF）、前後分力値（APGRF）の間で認められた。また、座面高を低く設定することで速度や股関節 ROM-PP、VGRF、APGRF の値が増加した。しかし、座面高を対象者の座位下腿長より 40mm 低く設定した場合、座面高を低く設定したことで VGRF は増加するものの、そのほかの値は減少した。</p> <p>これらの結果から、座面高の設定が股関節 ROM-PP に起因していることが示唆された。そのため、座面高の設定が低すぎる場合では、最適な下肢駆動の獲得はむずかしいことが示唆された。</p> <p>結論：効率的な車椅子下肢駆動は、使用者の身体機能、下肢の筋力と関節可動域等の物理的特性の組み合わせに応じて下側脚の長さにシートの高さを設定することによって達成することができる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

# 論 文 要 旨

報 告 番 号 (甲) ・ 乙	第 号	氏 名	久木原 博子
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>The Trauma, Depression, and Resilience of Earthquake/Tsunami/Nuclear Disaster Survivors of Hirono, Fukushima, Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年</p> <p>Psychiatry and Clinical Neurosciences, 2014 Jan 21. doi: 10.1111/pcn.12159. [Epub ahead of print]</p> <p>著者名</p> <p><b>Hiroko Kukihara, Niwako Yamawaki, Kumi Uchiyama, Shoichi Arai, Etsuo Horikawa</b></p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>(研究の目的)</p> <p>大地震による東日本を襲った津波は原子力発電所事故を引き起こし,放射能漏れによる大気汚染により地域住民は仮設住宅への避難を余儀なくされた.この研究の目的は,被災者(仮設住宅への避難生活者)の PTSD と抑うつと QOL を調査し,レジリエンスに関連する要因を明らかにすることであった.</p> <p>(方法)</p> <p>福島県広野町の仮設住宅に住む被災者 241 人(男:116 人,女:125 人)を対象に,属性, Impact of Events Scale-Revised, Zung Self-Rating Depression Scale, SF-36v2TM, そして Conner-Davidson Resilience Scale を用いて調査した.</p> <p>(結果)</p> <p>PTSD の高リスク者は 53.5% (33.2%は重度),抑うつ の発症率は 66.8% (傾度 33.2%, 中等度 19.1%, 重度 14.5%) であった.レジリエンス高群と低群を比較した結果, QOL,抑うつ, PTSD 得点に有意差があった.また,レジリエンスには職業,食/運動習慣,飲酒習慣が影響していた.</p> <p>(結論)</p> <p>大地震と津波による原子力発電所事故の被災者(仮設住宅への避難生活者)は,抑うつと PTSD の発症率が高かった.しかしながら,このような被災にあっても PTSD に耐える人がおり,レジリエンスは PTSD の有意な予防要因であった.したがって,被災者に仕事を提供し,健康的なライフスタイルを促し,レジリエンスを高める支援をすることは重要である.</p>			

備考 1 論文要旨は, 600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	鍋田紘美
<p>[ 論文題名 ] Association of salivary cortisol levels and later depressive state in elderly people living in a rural community: a three-year follow-up study</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁 - 頁, 発行西暦年 Journal of Affective Disorders</p> <p>著者名 Hiromi Nabeta; Yoshito Mizoguchi; Jun Matsushima; Yoshiomi Imamura; Itaru Watanabe; Tetsuya Tateishi; Naoki Kojima; Toshiro Kawashima; Shigeto Yamada; Akira Monji</p> <p>[ 要 旨 ] 目的 うつ病はメンタルヘルスに重要な要因となっており、将来のうつ状態の予見因子を同定することができれば予防にも有用である。心理的ストレスに關与しているコルチゾールがうつ状態のバイオマーカーになるかを、検討した。 方法 2004 年から 2006 年 (TimeA) に、佐賀県伊万里市黒川町在住の 65 歳以上の高齢者 400 人に認知症予防検診の案内を出し、226 名が参加した。検診は MMSE・FAB・BDI・生活状況について調査を行い、午前 10 時から 11 時の間に唾液の採取を行った。また、2007 年から 2009 年 (TimeB) に TimeA の参加者に追跡調査の依頼を行い、応募した 147 名 (男性 43 名、女性 104 名) に同様の検診を行った。参加者には、口頭と文書でインフォームドコンセントを行い、参加の同意を得た。本研究は、佐賀大学医学部倫理委員会の了承を得た。 結果 分析が可能であった 68 名 (男性 24 名、女性 44 名) は、TimeA において、MMSE・FAB・BDI、年齢、唾液中コルチゾール濃度に男女差はみられなかった。追加統計結果として、女性において、TimeA の唾液中コルチゾールと TimeA と TimeB の BDI の変化率に正の相関がみられた。 考察 伊万里市黒川町コホート研究の一環として、65 歳以上の高齢者におけるバイオマーカーと将来のうつ状態の関連を明らかにした。今回、唾液中コルチゾールは、女性においてのみうつ状態の変化率と有意な関連を示した。 結論 唾液中コルチゾールが高い高齢女性は、将来のうつ状態が強くなりやすいことを示唆している。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。